



アマチュアオーケストラ

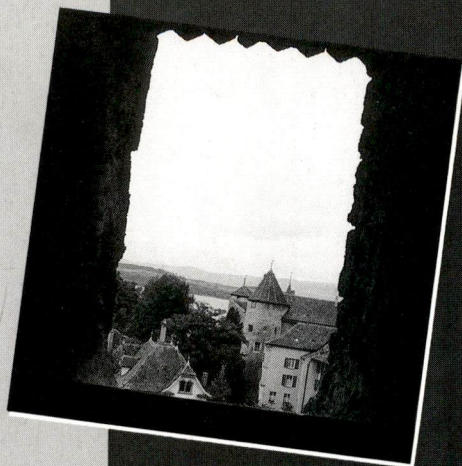
新交響楽団第143回演奏会

The New Symphony Orchestra the 143rd Concert

指揮

原田 幸一郎

HARADA Koichiro, conductor



ロッシーニ 歌劇「どろぼうかささぎ」序曲

泥棒鵲

Gioacchino ROSSINI : *La gazza ladra* Overture, 1817

伊福部 昭

交響譚詩

IFUKUBE Akira : *Ballata Sinfonica*, 1943

《伊福部 昭・傘寿記念シリーズⅢ》

ブラームス

交響曲第2番

Johannes BRAHMS : *Symphony No.2 in D major Op.73*, 1877

1994年4月23日(土)6:30pm.

東京芸術劇場

(池袋駅西口)

Saturday, April 23, 1994 at Tokyo Geijutsu Gekijo (Ikebukuro Sta. West Exit)

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第143回演奏会

The New Symphony Orchestra The 143rd Concert



指揮：原田 幸一郎

HARADA Koichiro, conductor

ロッシーニ：歌劇「どろぼうかかさぎ」序曲

Gioacchino ROSSINI : La gazza ladra Overture, 1817

伊福部 昭：交響譚詩

IFUKUBE Akira : Ballata Sinfonica, 1943

第1楽章 *Allegro capriccioso*

第2楽章 *Andante rapsodico*

ブラームス：交響曲第2番 ニ長調 作品73

Johannes BRAHMS : Symphony No.2 in D major Op.73, 1877

第1楽章 *Allegro non troppo*

第2楽章 *Adagio non troppo*

第3楽章 *Allegretto grazioso (Quasi Andantino)*

第4楽章 *Allegro con spirito*

1994年4月23日(土) 6:30p.m.

東京芸術劇場大ホール

Saturday, April 23, 1994 at Tokyo Geijutsu Gekijo

主催：新交響楽団

●指揮

原田 幸一郎

HARADA Koichiro, conductor



1945年生まれ。桐朋学園とジュリアード音楽院で斎藤秀雄、秋山和慶、ドロシー・ディレイ、イヴァン・ガラミアン氏らにヴァイオリンと室内楽および指揮法を学ぶ。69年から12年間、東京クワルテットの第1ヴァイオリンをつとめ、世界の檜舞台で常に高い評価を受けてきた。81年に東京クワルテットを離れ、クリーヴランド音楽院のヴァイオリン科主任教授とイエール大学、アスペン音楽祭でも教鞭をとりつつ、室内楽奏者として、ニューヨークのリンカーン・センターやワシントンD.C.等のコンサートで広く活躍した。

83年からは日本に居を移し、ソリストおよび室内楽奏者として内外で活躍。さらに86年には数住岸子と“NADA”（ナード）室内楽シリーズをスタート、従来にない高度なアンサンブルを誇っている。

88年4月、九州交響楽団の〈モーツァルト定期〉で指揮デビューを飾り、翌月の新日本フィル〈ハイドン定期〉の東京デビューも好評を博した。90年には新日本フィル定期デビュー、東京フィル〈モーツァルト定期〉、〈倉敷音楽祭祝祭管弦楽団〉等を指揮。以来、新日本フィル〈モーツァルト定期〉、札幌交響楽団定期等を指揮し、室内楽を究めた音楽家ならではの名演を聴かせている。94年には5月に札幌定期、6月に京都市響定期の指揮がそれぞれ決まっている。室内楽奏者として長年にわたって培われた、豊かで暖かな音楽性とアンサンブルでの明敏で細やかな感受性は、他の指揮者と一線を画するところである。

新交響楽団とは89年以来毎年共演しており、今回が6回目となる。

団員募集！

新交響楽団は会社員、教員、学生、主婦などなど、さまざまな職業・年齢にわたる団員で自主運営されているアマチュアオーケストラです。音楽監督の故芥川也寸志氏が長年にわたって主張し続けてきた「音楽はみんなのもの」を実践し、常に新しい視点を持って活動していくために、あなたの力が必要です。何はともあれ、ぜひ一

度練習をご覧ください。いつでも歓迎です。団費：入団費3,000円、団費月額4,000円。練習は毎週土曜午後6～9時、東京文化会館他にて。

なお、新響では入団に際してはオーディションがあります。詳細は下記安田までお問い合わせ下さい。

・連絡先……………安田浩三 ☎03(3352)5077

ロッシーニ：歌劇「どろぼうかかさぎ」序曲

前田 浩剛（チェロ）

Gioacchino ROSSINI : La gazza ladra Overture

「二幕のメロドラマあるいはオペラ・セミセリア『泥棒かかさぎ』は1817年、ロッシーニ（1792-1868）25歳のときに書かれた。彼のオペラ全40作（書き換えを含む）の中では、丁度折り返し地点の21作目に位置している。前年には『セビリアの理髪師』、『オテロ』が、この年には1月にローマで『シンデレラ』が初演されており、作曲者の最も脂の乗っていた時期に書かれた作品ということが出来る。ちなみにロッシーニは最後のオペラ『ウィリアム・テル』を37歳のときに書き上げたあとは、最晩年の傑作「小ミサ・ソレムニス」（1864）等の数曲以外は目立った作曲活動は行わず、事実上引退し、美食三昧の余生を送った。今日でもロッシーニの名前を冠したレシピが数多く伝わっているが、そのほとんどはトリュフやフォアグラをふんだんに使った高級料理である。ただし、彼の作った料理はたいてい塩辛く、あまり美味ではなかったと言われている。

原作はフランス人ドービニィとケニエの共作になる同名の戯曲で、イタリア人ゲラルディーニにより二幕の台本にまとめられた。ジャンルとしては、タイトルの「セミ・セリア」の語が示すとおり、軽快な喜歌劇であるオペラ・ブッフアと、厳粛で真面目なオペラ・セリアの中間的な分野に属する。『アルジェのイタリア女』、『セビリアの理髪師』等のロッシーニの代表的なオペラ・ブッフアはほとんどこの作品以前に書かれており、以後作曲の重点は『セミラミデ』、『ウィリアム・テル』等に代表されるセリアに移っていったことから、本作品はロッシーニの創作活動の転換点に位置付けることもできよう。

物語は、かかさぎ（西洋では不吉な鳥とされる）が銀の食器を盗んだことにより、無実の若い女中ニネッタに冤罪が着せられるが、処刑寸前に罪が晴らされて助かる、という一種の救済劇を主軸に展開される。

初演は1817年5月31日ミラノ・スカラ座で行われた。小説「赤と黒」の作家、スタンダールは音楽にも造詣が深く、とりわけロッシーニに対する愛着が深かったようで、浩瀚な「ロッシーニ伝」を著しているが、彼によれば、この初演は「作品が猛烈な熱狂を巻き起こしたので、観客は絶えず一斉に立ち上

がってロッシーニに喝采を浴びせた」ほどの成功を収めた。作曲者の生前は彼の代表作の一つとして知られていたが、どういうわけか、作曲者の死後急速に忘れられていき、今日でも上演される機会はほとんどないようである。

オペラ全曲の上演頻度の少なさに対し、序曲の方は『ウィリアム・テル』、『セビリアの理髪師』等と並ぶ、ロッシーニの代表的な管弦楽曲としてしばしば演奏会でも取り上げられている。曲は序奏のついたソナタ形式によっている。華やかな序奏（Maestoso marziale 4分の4拍子）は、戦争が終わり栄誉に包まれて田舎の家に帰還してきた若い兵士を描写している。印象的な冒頭の小太鼓のソロについて、スタンダールは次のように言っている。「序奏部に小太鼓を主要楽器として用いたために、こういってよければ現実感が生まれ、こんな感じは他のどんな音楽からも受けたことがない。否応なしに曲にひきこまれる」。主部は「以後に展開される事件に相応しい陰気な性格」（スタンダール）の、ほの暗い情熱を秘めたテーマによって始まる（Allegro 4分の3拍子）。この部分は、監獄に繋がれて処刑を待つヒロインのニネッタと、彼女を励ますため、密かに獄に潜入した若い農夫ビッポにより歌われる感動的な二重唱のオーケストラ伴奏をそのまま用いている。やがて作曲家のトレードマークともいえるべき、「ロッシーニ・クレッシェンド」（同一の旋律を反復しながら、少しずつアツチェレランドを加えつつ、クレッシェンドを行う。オーケストラの技量が問われる箇所でもある）による盛り上がりを見せながら、コーダを迎えて終わる。作曲年代が近いこともあって、全体的に（調性面、構成面等）『セビリアの理髪師』の序曲に近い雰囲気をもっている。

なお、本日の演奏はトロンボーン、チューバ、打楽器を補強して演奏効果を高めた、G. コーゲルによる編曲版によって行われる。

初演：1817年5月31日ミラノ・スカラ座にて。

楽器編成：ピッコロ、フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓2、トライアングル、弦楽5部。

伊福部 昭：交響譚詩

IFUKUBE Akira : Ballata Sinfonica

上原 誠 (打楽器)

伊福部昭の音楽は先回の当団演奏会で取り上げた最初の管弦楽曲『日本狂詩曲』から今日に至るまで、一貫して色濃く民族的色彩を帯びているが、これについて彼は自らの創造理念を次のように語っている。「作家は自己に忠実であれば、民族的である以外にありようはない。……芸術はその民族の特殊性を通して共通の人間性に到達しなければならないと考えている」そのルーツをたどれば、彼の家系が天皇家に比肩し得るほど古いもので、代々神官を務め「老子」を家学とする生粋の大和民族であること、また幼年時代に北海道の僻地で先住のアイヌ民族や、主に東北地方からの開拓農民らの生活・文化に深く関わることによって、民族間の差異を直接膚で感じ取った原体験など、生まれ・生い立ち・生活環境の特異性をあげることができる。しかしこれを真に決定付け、不動のものにしたのはロシア人音楽家アレクサンドル・チェレプニンとの出会いだった。

全くの独学で書き上げた『日本狂詩曲』がチェレプニン（作曲）賞1等に選ばれ、翌1936年来日したチェレプニンに会いに北海道から横浜まで出向いた伊福部は、ここで初めて作曲理論の講義を受けた。授業料はおろか、滞在費すら一切無料の上の破格の厚遇は、それだけ伊福部に対するチェレプニンの期待の大きさを物語っている。というのもチェレプニンは当時の日本の状況をピョートル大帝時代のロシア、すなわちやみくもに取り入れた西洋文化は結局後に何も残さず、当時下品なものとして蔑まれたロシア民謡に根ざした音楽がやがて国民音楽として力を得て後世に残るものとなったという歴史的事実に重ね合わせ、危惧の念を抱いていた。そして1936年の月刊『音楽新潮』誌によせた「日本の若き作曲家に」と題するメッセージを次のように結んでいる。「まず自国に忠実であり、自らの文化に忠実ならんことを務められよ、そして自らの民族生活を音楽に表現されよ。……諸君の音楽作品が国民的であるだけ、その国際的価値は増すであろう」

21歳の伊福部の作品に紛れもない日本の国民音楽を見いだしたチェレプニンは、作曲理論に加えて創作活動の根本理念をも、殊のほか熱心に伝授したにちがいない。

約1カ月間チェレプニンの教えを受けた後、伊福部は再び北海道へ帰り、元の林務官の生活に戻った。人里離れた国有林の中の小屋でランプの灯の下チェレプニン賞の賞金で買ったグローヴの音楽辞典を読破し、チェレプニンの示唆によりリムスキー＝コルサコフの『スペイン綺想曲』を克明に写譜しながら管弦楽法を学びとり、その間チェレプニンに捧げるために第2の管弦楽曲『土俗的三連画』を作曲した。

『交響譚詩』は再び母校・北海道帝国大学の研究室に戻った後に作曲され、民族的語法と交響曲の形式とを結びつけるにはまだ技術不足という8年前の師の言葉に従い、この作品を交響曲にはせず2部の構成とし第1部をソナタ形式にするのみにとどめた。

作曲の動機・経過についてスコアに次のようなメモが書き添えられている「第2次大戦中、蛍光質の研究に斃れた兄のために起稿し、1943年春に脱稿(札幌)したものです。戦争が烈しくなり、大きな編成を採ることが困難な時代だったので、2管持ち替えの小さなものとなりました。」ここにいう兄・勲もまた音楽を愛し、北大のオーケストラを兄が指揮し弟・昭がコンサート・マスターという時期もあったが、一方化学者として戦時に用いられた夜光塗料を開発し、その研究により命を落としてしまった。

曲の2つの部分はいずれも強く民族的色彩感を感じさせながら極めて明白な対比を見せている。すなわちアレグロ・カプリッチオーソの第1譚詩は力強くリズムックであるのに対し、アンダンテ・ラプソディークと指示された第2譚詩は静かな中にも大変表情豊かな広がりを見せ、伊福部作品としては例外的に静かなまま幕を閉じる。兄に対する哀悼の気持ちが込められているのであろう。

なお、この作品は日本音響株式会社（現・日本ビクター：戦争中の外来語追放のため、強制的に改称させられていた）の第2回管弦楽曲懸賞募集の第1位となり、山田和男指揮東京交響楽団によりレコード録音及び公開初演され、併せて文部大臣賞を授賞した。

初 演：1943年9月4日（録音）、同年11月20日（公開初演）

楽器編成：フルート2（2番はピッコロ持替）、オーボエ2（2番はコール・アングレ持替）、クラリネット2（2番はバス・クラリネット持替）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハーブ、弦楽5部。

ブラームス：交響曲 第2番 ニ長調 作品73

松下 俊行（フルート）

Johannes BRAHMS : Symphony No.2 in D major Op.73

来るべきものが、とうとうやってきたと感じている。

日管製の笛で、ファーストデヴィジョンバンド教本上巻第1ページ目のB♭の音を出してから23年目。オーケストラ歴17年。新響に入ってからでさえ、はや12年。

某私立大の文学部卒。入社13年目の、一応一兆円企業の中国担当課長補佐。年収は…言わずが華。中学生時分から知っている筒井筒の女房との間に一女一男あり。住宅ローンを抱え共稼ぎは絶対の条件。為に転勤不可。笛の外には無芸大食鯨飲馬食斗酒なお辞せず。ヘリゲルの「弓と禪」と綺堂の「半七捕物帳」が愛読書——という小市民的生活を送る36歳の平凡な男に、ついにこの曲が巡ってきた。

新響だけでもこの12年間で50回以上。更に「春の祭典」をお家芸とするオーケストラで過ごした学生時代を加えれば、実に80回余りの演奏会。にもかかわらず1回もこの曲を演奏する機会がなかったなどと口外すると、明日から変人扱いされかねないが、本当だからしかたがない。そしてこの間にブラームスの交響曲体験として、1番4番の2曲は、2回ずついづれもトップちまたを吹いているのだから、異常さに磨きがかかる。巷は「ブラ2」に充ちているのだから。アマチュアオケに10年以上もいて、この曲をやらずに済んだと云うのは、謂わば土砂降りの雨の間を駆け抜けて全然濡れずにいると云うに等しい。何という奇妙な人生だろう。

奇妙という点では新響も相当な物だ。何せ前回この曲を演ったのは——う～ん確か70年代 (!!) の事だったわい——などと土地の故老に昔語りをしてもらわねばならぬ程。現団員の半分はそれ以降の入団である。「ブラ2」は遠くなりにはけり。

そして流石さすがと言うべきか、このオケは他の3曲もつとの交響曲はその間にしっかりとあげている。尤も、「演奏はした」という状態だったかも知れない。2番以外は演奏するだけで、とてつもなく難しいシロモノである。1番の荘厳、3番の憂愁、4番の劇的な響きなどは挑んでも挑んでも、なかなかモノに出来ぬ。

確かに我々はブラームスの音楽、就中交響曲に對し或イメージを抱く事が出来る。これは重要な事だ

が、実際の演奏にそれを持ち込んだ瞬間、すでに勝負はついているのである。「ブラームスはかくあるべし」と云うイメージのもたらす重圧感に、普通に弾いてさえ重目の音楽は、いや増しに重くなる。別の言葉で「想い入れが過ぎる」とも言う。勿論、世に「ブラームスの弾き方」は伝統としても存在する。が音ごとに嘆息しながら弾くという訳では決してない。

こうしたイメージと実際の演奏とのギャップの大きい作品は世に幾つもある。例えば印象派の作品群。耳で捉えた感じそのままにモゴモゴ弾くと、全然サマにならない。これらの作品には、より明瞭な音が不可欠なのだ。

ブラームスの作品の場合にはこうした要素に加えて、あの晦渋かいじゅうとも言える音楽的語法と、擬古文じみた楽器遣いここに彼の作品の魅力は確かにあるのだが、演奏には悪条件となりがちであり、過剰に昂揚した精神と、技術的未解決部分を抱えたまま本番を迎えてしまう——というのが今までのパターン。正直言ってこれでは結果は知れている。現に私事乍ら、1、4番の最終楽章に出てくる笛のソロ。過去4回の出来について思い返すと忸怩じくじたるものあり、つい酒量が増えてしまう（要するにお前がヘタクソなんだよ）。

そうした挫折感によりやく終止符が打てるか否かの瀬戸際の2番。これは例外的な作品だ。調性的にも鳴り易いし、構造も良い意味で単純。加えて作曲者の気負いが少ない分、演奏者も安堵感を以て対峙出来る。この曲が巷に充ちている理由もここにある。どうもこれを逃すと今世紀中には演奏の機会が無いような気もするので、笛（因みに HELMUTH-HAMMIG, No.440——笛吹きすいげんの垂涎の名器）を仏壇に祭り（神棚が無いので）、家人に切火で送ってもらうことにしよう。

何だか仇討ちに出て行く気分——だな。

初 演：1877年12月30日に、ウィーン・フィルハーモニーの第4回演奏会で、ハンス・リヒター指揮の下に行われた。そして、特に第3楽章が再演されるほどの好評を受けた。翌年の1月10日にはライブツィヒで、ブラームス自身の指揮により演奏されている。なお、ブラームス自身の四手用ピアノ編曲は、1877年12月23日に私的に初演されたようである。
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部。

ッパがあの子生服の少年だったのである。良き師と才能に恵まれて、情熱を持って勤勉に練習を積み重ねたのであろう。彼は今ではわが国の代表的なトランペット奏者となっている。これもブラームスの2番がとりもつ縁なのかもしれない。

＊

ブラームスについてこんなエピソードがある。

彼が自作のクラリネット五重奏曲口短調の演奏を聴いた時のことである。この演奏は非常に優れたもので、彼はたいへん満足だった。「これぞわたしの意図した通りの演奏」と友人たちに語ったそうだ。

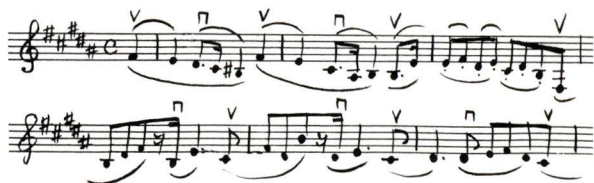
しばらくして、今度は別のグループの演奏を聴いたブラームスは、それが全く異なる曲の解釈であったにもかかわらず、この演奏にも大変な満足を示した。友人はこれほど相違した2つの演奏のいずれにもブラームスが「完璧な解釈」と満足したことに驚いた。

これに対して作曲家は答えた。「2つの解釈には全然似たところはなかった。しかしいずれの演奏も演奏者たちは自分たちのすべてを捧げて作曲者の意図をそれぞれの立場から忠実に伝えたのである」

優れた作品ほど、優れた演奏家による異なった解釈の余地があることを教えてくれるエピソードである。さて、今晚の原田氏と新響の演奏は作曲者の意図をどこまで表現できるだろうか。

Danke schön, Johannes Brahms!

石川嘉一 (チェロ)



カラヤン/ベルリン・フィルのボーイング (2楽章)

SOMETHING NEW

“創造。には

新鮮な情報と高度な技術

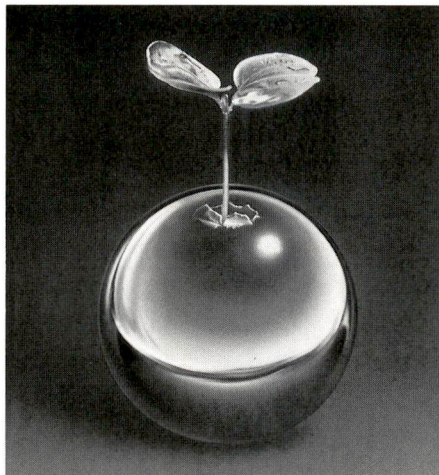
そして温かいハートが必要です。

人と機械を見つめて90余年。

いま、守谷商会は21世紀をめざし

新たな進化を、若いエネルギーに

託しています。



機械の総合商社

With Industry Since 1901
MORITANI

株式会社 守谷商会

取締役社長 守谷 正平

〈本 社〉 東京都中央区八重洲1-4-22 〒103
TEL (03) 3278-6111 ダイヤルイン

〈支 店〉 大阪・名古屋・福岡・金沢・仙台・札幌
広島・高松

〈海 外〉 台北・高雄・ソウル・香港・ニューヨーク
シカゴ・マダガスカル・デュッセルドルフ
ヨハネスブルグ・ジャカルタ

〈資本金〉 8億1,000万円 〈売上高〉 2,019億円

夢の交響曲 ブラームスの第2交響曲

1966年。ヘルベルト・フォン・カラヤンとベルリン・フィルが2度目の来日をした(初来日は1957年)。今回は待望の「コリオラン」と「レオノーレ第3番」を加えたベートーヴェンの交響曲全曲のチクルスで、これを5日間連続で演奏した。当時、旅行先の都市でこのような企画を世界中でこのオーケストラが、また指揮者が可能だったのだろうか。それゆえ切符の購入は非常に難しく、僕も徹夜で並んで運よく5日間の連続券を買うことができた。何しろベートーヴェンの全交響曲を世界最高の指揮者と名門ベルリン・フィルで聴けるのだ。このような機会は一生に滅多にあるものではない。

また、幸運なことに僕は彼らの練習を聴けることになったのである。午前9時にホテルに集合、楽員と一緒にバスで新装なったN響練習所(高輪)に向けて出発した。知り合いだった首席チェリストのボロヴィツキーさん(昨年の新響のベルリン芸術週間演奏会でもお世話になった)から団長のストレーゼマン博士に紹介してもらったのである。最後にはマエストロの許可が必要だったが、幸いカラヤンとは初来日以来、何回か面識があったので、なんとかOKが出た。条件は「指定の場所で動かず静かに聴くこと」だけで、親切にも僕のために第1ヴァイオリンの後ろに椅子を用意して下さった。このときの見学者は他に2名、指揮者の岩城宏之さんと大町陽一郎さんだった。

練習時間は10時から13時まで、曲目はブラームスの2番。練習所のドアが開くとさっそうとカラヤンが入ってきた。黒いセーターと白っぽいズボン、手にはスコアと指揮棒、それに赤鉛筆を持っていた。上品でなんとスマートな指揮者だろう。一流の俳優も顔負けである。まず「Guten Morgen!」と明るく挨拶し、「今日はブラームスのアダージョから」。チェロで始まるころだ。温かい響きとなめらかさはさすがと思ったが、カラヤンは何回も何回も止めては繰り返し練習をした。

「もっと表情をつけてドルチェに。自然に音が流れるように!」この長いフレーズは1本の長い長い

弓で弾いているように! そしてもう少し重厚に!」

練習は入念かつ厳格だった。精神を集中するため彼は一切むだ口をきかず、エピソードなども語らない。やがてある木管楽器がミスをした時、彼は「許される一瞬の失敗と根本的なミスを区別するよう」求めた。楽員にはいつも最大限の規律を要求しているのである。彼自身が楽員たちに模範を示し、常にはっきりした意識を持ちながら緊張している。美しく自然に音楽を響かせるため、興奮した動作で音の流れを止めるようなことはせず、ただオーケストラを援助しているように感じられた。

この緊張した練習中にゴトンと音がした。しかし彼は音楽に集中し、顔色ひとつ変えなかった。これがトスカニーニだったらどうなっただろう! 物音の原因がわかった。誰かがコントラバスの箱に隠れていたのである。学生服の少年で、楽員についてきたファンらしかった。前半の練習が終わるとその少年は姿を現したが、楽員たちは彼を温かく迎えていた。少年のお目当てはどうやらトランペットのヴェーゼニク教授で、ラッパを教えてほしい様子だった。言葉はあまりわからないらしく、紙に時間と場所を書いてた。それを見て僕は2人の間に入って話をまとめることにした。少年は教授と会う時間と場所をもう一度確認して「ダンケ」と嬉しそうに帰って行った。

しばらくすると今度は楽器係のバルトロークさんが来て「スケジュールが少し変わったことをオーケストラのみんなに伝えてほしい」と日本語で書かれたメモを僕に手渡した。このくらいならなんとかドイツ語で言えそうだったので引き受けると、なんと指揮台の上へ連れて行かれたのである。ちょっと前まで大指揮者カラヤンが上がっていた台だ。本物のベルリン・フィルの前。感激の瞬間だった。やっと何とか伝言を伝えることができると、メンバーから拍手があがった。こんなこともあって、僕にとってブラームスの2番は「夢の交響曲」なのである。

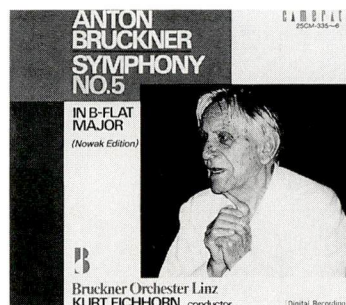
それから6年後の1972年、僕はドイツへ行き、ベルリンで「バラの騎士」を聴いた。そのオペラのラ



アイヒホルン最高の名演。

ブルックナー指揮者の力量が問われる第5番に、深い味わいと感動に満ちた最新録音が登場!!

ブルックナー： 交響曲第5番 アイヒホルン リンツ・ブルックナー管弦楽団



●ブルックナー

交響曲第5番変ロ長調(ノヴァーク版)

クルト・アイヒホルン指揮

リンツ・ブルックナー管弦楽団

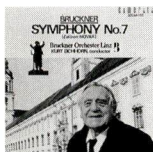
[CD]25CM-335~6(2枚組) ¥5,150(税込)

★デジタル最新録音:1993年6~7月, リンツ・ブルックナーハウス

絶賛発売中

1996年“ブルックナー没後100年記念”

アイヒホルン=リンツ・ブルックナー管弦楽団



●ブルックナー
交響曲第7番ホ長調
(ノヴァーク版)

[CD]32CM-165

¥3,008(税込)

「レコード芸術」推薦



●ブルックナー
交響曲第2番ハ短調
(1872&1873年稿) 世界初録音

[CD]30CM-195~6(2枚組)

¥5,634(税込)

「レコード芸術」準特選

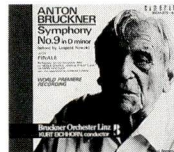


●ブルックナー
交響曲第8番ハ短調
(ノヴァーク・1890年版)

[CD]32CM-225

¥3,008(税込)

「レコード芸術」準推薦



●ブルックナー
交響曲第9番(終楽章付)
(ノヴァーク+1992年12月復元版)
世界初録音

[CD]30CM-275~6(2枚組)

¥5,634(税込)

「レコード芸術」特選

今秋発売予定

●ブルックナー
交響曲第6番イ長調
(ノヴァーク版)

[CD]30CM-345
¥3,090(税込)

★デジタル最新録音:

1994年3月,

リンツ・ブルックナーハウス

「ブルックナー交響曲全集」進行中!

camera
カメラタトウキョウ

〒150 東京都渋谷区神宮前5-50-6 青山テネックス8F ☎03-3498-5890 FAX.03-3498-6239

詞を綴つた人がいて、メロディをつけた人がいる。
わづらん必要だ。

この大団を一曲一曲と分けていって、
そのなかで、日本に誰の音楽が在るかを
日本にはないもの、日本のルーツ音楽はたいてい
大勢は政府を指してゐた。

